

# 教育センター通信

ほど  
火床の火の心を紡ぐ

第6号（通算第45号）  
平成29年10月25日  
三条市小中一貫教育推進課  
教育センター 発行



## 「当事者意識」が生み出す力

教育センター 指導主事 土佐 和久

「子どもが変容したすばらしい授業だったな。」

「授業者の意図や思いが伝わるよい授業研修会だったな。」

たくさんの公開授業を見せていただく中で、私はそんなふうを感じる事が多くあります。当日までのエピソードを伺うと、同僚の先生方が一緒になって考え、創り上げてこられた授業であることがほとんどです。「(自分の学校だけではなく)学園の先生方が親身になってかかわってくださった。いただいた意見がとても参考になった。」というお話を聞かせていただくことも多くあります。学園の中での協働の姿に触れ、うれしい気持ちになります。

このことは授業だけではなく、様々な行事、会議、研修なども同様です。「子どもが活躍したよい行事だったな。」「議論が深まった会議だったな。」「勉強になる研修だったな。」と成就感や達成感を感じる背景やプロセスには、多くの先生方による目的や目標の共有と、その実現のために「自分事としてかかわっていききたい。」という高い意識があります。「制度や枠組み自体が、直接成果を出すのではなく、『当事者意識』をもった先生方の建設的な議論、力の結集があってこそ成果につながるのだ。」と改めて気付かされます。

さて、今年度からコミュニティ・スクールのモデル校（三条おおじま学園3校、さかえ学園4校）の活動が本格的に始まっています。各モデル校や学園の会議に参加させていただくと、地域・保護者の委員の方々が、「当事者意識」をもって主体的・積極的にかかわる姿がたくさん見られるようになっていきます。建設的な意見を出し「こんな協力ができますよ。」と提案して下さったり、学校の先生方が気付かない視点から意見をくださったり、地域の方へ行事への参加を呼びかけて下さったりするなど、これからの子どもたちへの教育に関して新たな可能性を感じることができます。

こうした「当事者意識」の輪を、学校内ではもちろんのこと、学園全体、地域社会全体へと広げていくことで、教育の力は無限に高まっていくのだと思います。先生方の一人一人の高い意識を結集して、小中一貫教育とコミュニティ・スクールを車の両輪としながら、これからの三条市の教育を洗練・進化させていきたいと考えます。

## 前期(小1～4年)担当教員から学ぶ研修講座 (9月29日)



石川岳人教諭(嵐南小学校)から、数学(中学1年生「比例と反比例」)の模擬授業を行っていただき、その後受講者(中学校教員等)と意見交換を行いました。受講者の声にもありますが、「細やかな声かけ、道具への配慮、ていねいな指示」が参考になったという感想が聞かれました。

また、三条嵐南学園ならではの教職員研修の取組についても教えていただきました。

(写真は、数学の模擬授業の様子)

### 【受講者の声】

- 少人数の研修だったので参加しやすい研修で良かったです。模擬授業では、細やかな声かけ、道具の配慮、丁寧な指示が参考になりました。負のグラフの導入では、今後の授業のヒントを得ることができました。授業に生かしたいと思います。
- 当たり前で教えている内容でも、小学校の先生からの視点で見ると違った方向からアプローチする見方もあることが参考になった。特に座標をとばしてグラフを作成し、どう座標平面をとるか考えさせるのも面白い方法だと思った。小学校の先生の中学校授業も良いが、6年生に直結する内容をどのように指導するのも見てみたい。
- 模擬授業ありがとうございました。一つ一つ生徒(職員)の言葉に対して、声かけをする様子は感動しましたし、取り入れたいと思いました。関数指導は本当に難しいです。今日のことをきっかけにしてより良い指導を考えていきたいです。

## 後期(中2、3年)担当教員から学ぶ研修講座 (10月11日)

関拓也教諭(栄中学校)から、社会(中学2年生、地理的分野「中部地方～日本と新潟のものづくりを中心に～」)の模擬授業を行っていただき、その後受講者(小学校教員等)と意見交換を行いました。中学校の授業を体験したり、関先生の講義を聞いたりすることにより、小学校から、中学校やその先の人生を見据えた指導をしていくことの大切さを感じ取られた方が多くいらっしゃいました。

(写真は、社会科の模擬授業の様子)



### 【受講者の声】

- 小学校で教える教科の内容を中学校で専門的に教えるというイメージで受講させていただきました。奥深く突っ込んで子どもたちに考えさせる術を教えてくださいました。社会を考える際の背景や問題に迫り、受講しながらわくわくしました。ありがとうございました。
- 社会科を学ぶ楽しさを体験しました。身近な社会とつなぐことでおもしろくなると思いました。小中一貫という視点からは、互いを知る、理解することから出発すると考えています。小学校教員は専門教科についてはある程度勉強しています。さらに拡大していく必要があります。
- 研修を行うことで自分の日々の授業を見つめ直すことができました。今後参考にしていきたいと思うことが大いにありましたし、さらに教材研究や社会全体に向けて、子どもたちにどう伝えていくか考えていくことが必要だと感じました。これからもたくさん学び、自分自身のレベルアップをしていきたいです。

## 特別支援教育の理念に基づく授業の配慮

教育センター 指導主事 池田 岳康

平成 24 年の文部科学省の調査によれば、全般的な知的発達に遅れはないものの、学習面か行動面に著しい困難があると小中学校の通常学級担任が判断した子どもの割合が、約 6.5%であることが明らかになっています。中でも学習面で著しい困難のある子どもは 4.5%と報告されています。

学習面での困難は、子ども本人も他の子との比較を敏感に感じ取る部分です。また、学校生活は「聞く・話す・読む・書く・計算する・推論する」といった授業を核とした学習活動が中心です。授業が分からない、授業に参加できないことが、学習回避や登校しぶりにつながることも予想されます。

特別支援教育とは、子ども一人一人の教育的ニーズや特性に配慮した教育であり、一人一人の子どもを大切にできる教育にほかなりません。特別支援教育の理念に基づき、学校生活の中心である授業の進め方を改善していくことが重要です。

今回は、授業参観をとおして見られた事例に基づき、どの子ども主体的に参加できる、どの子ども大切にできる授業の進め方の一端を探っていきます。

### 【事例 1】

学習問題を提示し、板書し視写をする場面です。「◎6 + 7 の計算は、どうしたらよいのだろう」という内容です。この先生は、「6 + 7 の」まで書き、敢えて書くのを止める、「計算は」で止める、といった板書を先生はしていました。

書くことを苦手に行っている子はいます。注意すべき目標に素早く目を向けられない、見たものを素早く手の動きに反映させることが難しいことが予想されます。でも、量を調節すればできる場合があります。短く示すことで書くべきところに注目が行きやすくなります。提示された分量が少ないので取りかかりは遅くても、すべて書けそうだという見通しはもてます。よって、視写することは嫌にならないと思います。また、見通しをもちやすい子は、書く間に次に続く文章を考えます。苦手に配慮しつつ、強い力も伸ばすことができると思います。

### 【事例 2】

グループで話し合ったり、代表者がクラスの全員に自分の考えを発表したりする場面です。子どもが発表すると、「伝わったかな？」と先生は確認していました。

「分かった？」と聞きたいところです。しかし考えてみると「分かった」の反対は「分からない」です。学習面で苦手意識の低い子は、「分からない」とは自分では言いにくいものです。一生懸命発表した子にしてみれば、「なんで分かってくれないんだ」という気持ちになり、相手に否定的な感情をもつかもしれません。「伝わった」の反対は、「伝わらない」です。「伝わらない」部分は、「どこが伝わらなかった？」と部分を具体的に尋ねることができます。「なんで伝わらなかった？」と理由を聞くことができます。発表者にして見れば、伝わらないことは発表者自身の責任になります。相手に伝えるためにどんな言葉を選べばよいか、自分のことを見つめ直す（セルフモニタリング）のチャンスができます。

### 【事例 3】

子どもから、「分からない」とつぶやきがでました。その時、先生は「～さんはどこが分からないと思う」とクラスに投げかけていました。

分からないことをクラスで共有し授業が進みます。分からないことを恥ずかしく思わない、できないことや分からないことが当たり前という意識が醸成され、どの子ども授業に向きやすくなります。そもそも、分からないことは授業をとおして学ぶのです。

特別支援教育の理念を活かした授業とは、子どもの意識を大切に、今ある子どもの現状からスタートする授業です。配慮が必要なお子さんへの手立ては、ほかの多くの子にとっても分かりやすく活躍できる手立てになります。ぜひ子どものつまずきや実態、意識を把握していただきたいと考えます。詳細なアセスメントに関しては、教育センターも協力いたします。ご活用ください。

# 潜水調査船「しんかい6500」や「無人探査機」が見てきた深海の世界

講師：国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)広報課アドバイザー 土屋 利雄 様

10月5日(木) 三条市立第一中学校 / 6日(金) 三条市立栄中学校、三条市立第三中学校



「科学ゼミナール」が、第一中学校、栄中学校と第三中学校を会場に全校生徒が参加して開催されました。今年で12回目となります。今年度は、講師の土屋 利雄様から「～潜水調査船『しんかい6500』や『無人探査機』が見てきた深海の世界～」という演題でご講演をいただきました。生徒の皆さんは、深海の生物や深海底の亀裂などの珍しい映像に興味をもって見ていました。途中、中川翔子さんの「飛び出せ科学くん」での「しんかい6500」への登場場面や有村架純さんのJAMSTECを舞台にしたドラマ「海に降る」の1シーンが流れると会場が和やかになる一コマもありました。

講演後「どうしたらJAMSTECに入れますか？」との質問に土屋様は、「夢を持ち続け、高校、大学でしっかり勉強してください。」と答えてくださっていました。30

年度は第二中・第四中・大島中で、31年度は大崎中・本成寺中・下田中で開催予定です。皆さんの将来や生き方についての希望が育まれていきますように。

◆海の水深の平均は約3,800mである。深海とは200mより深い海のことをいう。  
◆水の中は電波が伝わらないので、カラー画像などは音波を使って母船に伝えている。

◆「しんかい6500」は、チタン合金製耐圧殻(3人乗り)を中心に構成され、浮き沈みはおもりの重さで沈み、おもりを切り離して浮く(水深6,500mまで潜水2時間半、調査活動3時間、浮上2時間半)。6,500mの水圧は1cm<sup>2</sup>に650kgの重さがかかる(ほぼどの面積に軽自動車1台分)。金属バットはべっしょんこになってしまう。

◆世界の海の98%を調査できる。2011年8月東北地方太平洋沖地震でできた深海底の亀裂(水深5,351m、幅約1m、長さ約80m)を撮影した。

◆「無人深海カメラシステム」で水深8,178mでのシンカイクサウオの仲間の探餌行動の撮影に成功した(世界最深)。

◆深海の熱水噴出孔周辺の様子は、地球上で生命が生まれた状況に似ている。熱水噴出孔周辺のチューブワームは化学合成細菌と共生し栄養を得ている。熱水噴出孔周辺と似たような環境が考えられる土星の衛星エンケラドス、木星の衛星エウロパでは、地球外生命体が存在する可能性がある。

若い者が夢をもって  
こういう仕事の職人  
になりたいと言っているのに、  
試もしないで断るのはどういふも

## 三条の伝統産業を生業とした若手鑿(のみ)鍛冶職人 Part①

～ 金物というか工業の町だということすら知りませんでした… ～

9月の「第5回三条学講座」で、全国トップクラスの鑿(のみ)鍛冶職人池田慶郎様から、鋼と鉄の違いや刃物づくりの工程や温度管理などについてのお話をお聞きし、鍛接等の迫力ある名人技を拝見し、実体験もさせていただきました。今年度は、若手鍛冶職人の竹村徳和様(湯沢町出身)からもお話をお聞きする予定でしたが…。その後、改めてお二人からお話を伺うことができました。

高校を卒業してすぐ18歳でこの仕事に就き、今年で11年目を迎えた竹村さん。「苦しかったこと辛かったことは毎日ですね。作業がもううまくいかないしね、技術不足でして。うれしいことは、まだ全然ないですね…。」と。また、「三条なんてはっきり言ってあの当時、全然伝統産業なんてPRしてなかったじゃないですか。金物というか工業の町だということすら知りませんでした。六日町高校の山岳部だったんで、三条の県央工業山岳部強えよな、毎回全国大会行くよなぐらいの認識でした。」と当時の三条を。「高校2年の進路を考えると、製造関係や美大を調べたのですがなかなかいいところがなくて。本当は『彫金とか鍛金』とか金属工芸をやってみたかったです。母親があるとき新聞に師匠の記事が載っていたのをいきなり持ってきて、『この人のところに電話かけたからちょっと行ってこい!』と。その後高校2年の秋頃から、断られたこともありましたが何回か三条に来ました。(中略)自分もそのときそうなるうとは思ってなかったのですが…。(そんな竹村さん、今では四代目に。)

師匠の池田さんは、当時のことをこんなふうに。「お母さんには『俺の仕事なんか大変だから止めた方がいい。大学へ行って自分の専門的なことを勉強した方がいい。』と断っていました。ところが、お母さんから『若い者が夢をもってこういう仕事の職人になりたいと言っているのに、試もしないで断るのはどういふものでしょうか?』と言われました。それで、こういう考えをもっている親の子どもさんであればこれはなかなか違うんじゃないのかと閃いて、だったら見習いとして研修を1年やらせてみようと思ひ受けました。」と。(次号に続く)

